明治初期千歳市でスケッチされた「鮭猟」とは，どのような方法によるものか？
―明治初期のテシ・ウライを考える―

What kind of method is "salmon hunting" sketched in Chitose, Hokkaido in the early Meiji era?
- survey on so-called *Teshi* and *Urai* -

石橋 孝夫*
Takao ISHIBASHI*

要　旨

本稿は明治初期，開拓使にいた絵師「川口月村」が現在の千歳市を流れる千歳川で描いたスケッチに記録された漁撈施設がどのような性格のものかについて考察したものである．年代からみると前時代からあった場所請負人が運営していたサケ・マス捕獲施設を引きついだとみられるが，その形態は少なくとも筆者は見たことない形態である．これまでの知見をもとにすると筆者は「ウライ」ではないかと考えた．しかし同地方の天保（1830）年間以降の場所請負人が設置してしていた８施設はすべて「てす（テシ）」と呼ばれていたという記録がある（藤村, 1900）．さらに，このスケッチの数年後千歳川下流で記録された「ウライ」の図をみると，川口月村のスケッチとは異なる．したがって，筆者の「ウライ」と「テシ」の認識は少なくともこれらの図とは異なっていたことが理解された．「テシ・ウライ」については月村がこのスケッチを描いた直後から開拓使の規制が始まり，少なくとも明治末にはほとんどが姿を消したとみられる．また，全道的にみると「テシ・ウライ」の施設名は現在も残っているが，その形態と名称は従来の研究なども含め必ずしも一致しない面があり，それがどのような理由であるかなど，さらに調査検討する必要がある．

キーワード：テシ・ウライ，内水面漁撈施設，サケ・マス漁

はじめに

テシ・ウライはアイヌ民族の中小河川の合流点などに設置された漁撈施設で，サケマスを対象とした施設のイメージが強い．また地名としても全道的に残っている．またサケマス以外にもチョウザメなどの現在は絶滅してしまった魚類（小野, 1980）やヤツメウナギやシシャモなどもこの漁法の対象だったことも，近年知られている（瀬川, 2002）．

幕末頃から明治にかけては「テス網・ウライ網」という呼称も生まれ，まず「ウライ網」が明治６（1873）年開拓使札幌本庁無号達で使用禁止となり，その後「テス網」も禁止となった（山田, 2021）．

その後，全道の河川では一部を除きサケマス漁が全面禁漁となり，これらの施設は大正時代末期（1920年代）には完全に消滅したと推定される．このためテシ・ウライの実態については，知里真志保（知里, 1959）など先学の研究もあるが，その定義や設置環境なども含め，なお不明な点が多い．

筆者は北海道石狩市で考古学的調査にたずさわる中で縄文時代や中近世期の内水面漁撈施設を調

* いしかり砂丘の風資料館（学芸協力員）　〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4

査する機会があり，これらとテシ・ウライの関係に関心をもってきた．数年前，明治初期開拓使に雇われていた「川口月村」という人が，現在の千歳市（図１）で行われていたサケ漁の施設のスケッチを残していることを知り，調査を進めてきた．ただ，昨今のコロナ禍もありまだスケッチは実見ができておらず提供された画像のみの検討で，準備不足の感も否めないが，以下に所見を述べることとしたい．

１．川口月村の図集　『北海圖志』，『従函館到札幌北海圖誌』，『明治初年函館札幌間道中絵図』について

本稿で取り上げるスケッチが含まれた図集は前記のとおり３冊ある．所蔵先は『北海圖志』が岩手県立博物館（図２），『従函館到札幌北海圖誌』盛岡市先人記念館（図３），『明治初年函館札幌間道中絵図』が北海道大学附属図書館である．

この３冊は『北海圖志』が正本，後の２冊が写本と考えられている．なお，北海道大学のものは収蔵時点で図集名がなく，高倉新一郎氏が仮称したものが図集名となっている（高倉, 1987）．

これら３つの図集に収録されているスケッチはすべて同じ内容ではなく，単純に正本写本という，くくりでは説明できない部分がある．なお本稿で扱う図は『北海圖志』では「千歳」「千年川鮭猟之図」の２枚．『従函館到札幌北海圖誌』では「千歳駅鮭猟」．『明治初年函館札幌間道中絵

図１．千歳市の位置．

図２．『北海圖誌』　岩手県立博物館蔵．

図３．『従函館到札幌北海圖誌』　盛岡市先人記念館蔵．

図４．川口月村肖像　盛岡市先人記念館蔵．

図』では「千歳」のそれぞれ１枚の計４枚のスケッチを取り上げる．後に述べるように単に「千歳」と題された２枚のスケッチは，直接，サケ漁の様子が描かれているわけでない．しかしこれらは「千歳駅鮭猟」図の下書きと考えられるもので，関連性があるので取り上げている．

２．「川口月村」の経歴について

川口月村（図４）　幼名は「亀次郎」．後に「宣寿」となった．弘化２（1845）年，盛岡藩士で円山四条派の画人川口月嶺の長男として生まれた．父，月嶺から画を学んだ．戊辰戦争後の明治３（1870）年８月函館に赴き，その後，北海道開拓使に採用され，測量の仕事に従事した（岩手県HP）．本稿で取り上げたスケッチは，開拓使の仕事のかたわらで生み出されたものと考えられる．

開拓使での勤務は明治４（1871）年５月～同６月と明治５（1872）７月～同年11月とされる（三浦, 2007）．没年は明治37（1904）年．

なお後述する船越長善は川口月嶺門下で月村の辞職後，明治６（1873）年開拓使勤め「千年郡千年川下流ヲサツ西南ヲ望」（「札幌近郊の墨絵」所収・北海道大学北方圏フィールド科学センター植物園所蔵）のスケッチを残している．彼が開拓使に採用されたのは月村の辞職の翌年であり，月村の働きかけがあったと推測される．

３．描かれた図の解読

次にスケッチされた内容について検討する．それぞれ付された「千歳」，「千年川」，「千歳駅」の地名から，現在の千歳市内で描かれたのは明らかである．

①『北海圖志』「千歳」，「千年川鮭猟之図」（図５～図８）

月村の開拓使勤務の期間と「鮭猟」という記述から考えると，後述する２点も含め，明治５（1872）年の秋描かれたものと推定できる．

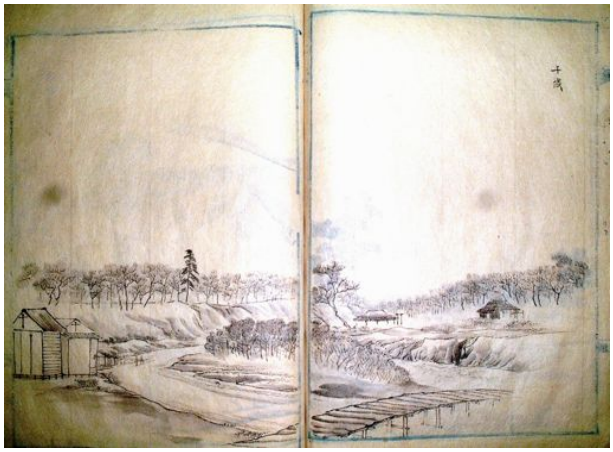

図５．『北海圖志』「千歳」．

まず，この「千歳」（図５）には，右下に板を横に並べた橋が描かれているが，途中でやめている．また川の流れは，図の奥から手前側に流れていると考えられる．川は二股に分かれ，中央に比較的若い木が生えた中州と思われるものがある．

図の右岸側に板壁の倉庫のような建物２棟がある．左岸側にかなり落差のある川岸とその上に草ぶきの２棟の建物がある．とくに左の大きな木の下にある建物の前には門のようなものが見える．

後述する北海道大学所蔵の『明治初年函館札幌間道中絵図』の「千歳」にも同じ建物が描かれ，やはり門のようなものがあり，こちらは「鳥居」のようにもみえる．題名も「千歳」とあり，②に示す北海道大学所蔵の「千歳」図と同じ場所を描いたものでどちらかが写しなのであろう．また，この図は「千歳駅鮭猟」の下絵と考えることができる．

次に「千年川鮭猟之図」（図６）をみてみよう．いうまでもなく題名の「千年川」は現在の「千歳川」である．図は手前に一棟の藁屋根の家．ただし，壁が描かれていない．スケッチだからそうなのか不明だが，対岸の手前の一棟もやはり壁がないように見える．その建物の隣には，川の中の思われる位置に網状のものがあるが，何であるか不明．その上側に細長い二本組の板を渡した橋脚の高い橋が描かれている．橋の板の渡し方は図10に示した「千歳駅鮭猟」とは異なってい

る．また，後述する幕末の『夕張日誌』にある「千歳川番屋図」の橋の板の並べ方と同じである．

橋の上には２人の男性が左岸側に向かって歩く姿が描かれている（図６）．その背を見ると，後ろの人物は何を負っているか不明だが，前を行く人物は木の枝に刺した魚をかついでいるのが見て取れる．魚の大きさは首から腰近くまであり，かなり大きな魚である．大きさからみてサケと思われる（図７）．

この図で注目されるのは橋上流の川の中に，棒を立てたようなものが多数描かれていることである．

多数の棒は「杭」とみられる．その配置は何らかの目的をもって設置された「杭列」をうかがわせる（図８）．また，その付近に６隻ほどの丸木舟も係留されている．

「杭列」の配置は，川のほぼ中央では下流に開いた「コの字」状の部分と両岸に向かう「ハの字状杭列」の二つからなっている．また左岸側近く

図６．「『北海圖志』「千年川鮭猟之図」．

図７．魚を背負う人（図６の部分拡大）．

図８．川の杭列と丸木舟（図６の部分拡大）．

ではさらに上流に別の杭列があり，２列になっている．これらは，川をほぼ遮断するような配置にみえる．

筆者は，おそらくこれが題名にある「鮭猟」の正体と考える．また，左岸近くの二重の杭列には，すき間がある．これは魚道あるいは舟を通すための通路の可能性もある．またこの部分の岸には河岸を上り下りするための道が見える．

川の幅は不明だが仮に左岸側に横向きに係留してある丸木舟が仮に４m程度と仮定すれば20m程度の川幅ともみることができよう．

なお，右岸近くの横になった丸木舟の右側に上流に向かって細い棒を持った人の姿のようなものが見えるが，画像上では何なのか読み取れない．

②『明治初年函館札幌間道中絵図』「千歳」，『従函館到札幌北海圖誌』「千歳駅鮭猟」（図９～図14）

次に，北海道大学の『明治初年函館札幌間道中絵図』中の「千歳」（図９）から述べる．これについては同大学北方資料データベースを参照した．すでに①で述べたように，この図には橋が描かれていないだけで『北海圖志』の「千歳」同じ構図である．

この図は中央から左手前に流れる川と右岸側に３棟の建物．そして図のほぼ中央，左岸の高台の大きい木の下に１棟とその右手の林の前に１棟の建物が描かれている．またこれの建物がある高台と川岸は結構な高さの崖面となっている．また，中州があるようにも見え，川は二股に流れているのかもしれない．中州には木が密集して生えている．

また，図のほぼ中央の大きな木の下にある建物の前に「鳥居」のように見える門のようなものがある点である．次に述べる「千歳駅鮭猟」では人物の陰に隠れて見えなくなっているが，これが鳥居とすれば位置的に現在の「千歳神社」の前身（弁天社）の可能性がある．

また，この図の川には橋も杭も丸木舟も描かれていないが，この図に「杭列」と「橋」「馬」「人物」を書き加えると「千歳駅鮭猟」の図となり，このスケッチは下絵と考えられる．

次に「千歳駅鮭猟」（図11）について述べる．「千歳駅」とは「駅逓」のことと思われる．

千歳駅は明治５年10月あるいは12月の開業とされるが，もともとこの付近は江戸時代から「千歳番屋」あるいは「千歳会所」などといわれる施設があり，本図の左に描かれている３棟の物はそう

図９．『明治初年函館札幌間道中絵図』「千歳」（北海道大学北方資料データベース）．

図10．（同左）右岸の建物付近．

図11．『従函館到札幌北海圖誌』「千歳駅鮭猟」．

図13．（部分拡大）橋中央の親子．

図12．（部分拡大）馬，人物．

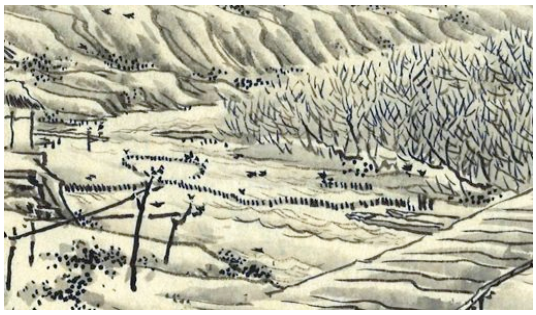

図14．（部分拡大）川の中の杭列．

した施設の附属建物（蔵）の可能性がある（図11）．構図は画面左から右に橋がかかり，橋手前に馬と２人の人物が描かれている．手前の人物は馬の背に荷をつけている．その荷はムシロ（筵）のようなものに巻かれた魚で，そのことはムシロからはみ出た魚の尾部が見えている事からわかる．魚は馬の横腹いっぱいの大きさで，大形の魚であることがわかる．

さらに，もう１人の人物は竹のようなもので編んだ魚籠のように首がすぼまった大形の籠を背負っている．その籠からも数匹の魚の頭が見えている．籠の大きさからみて大形の魚とみられ，馬の荷の筵に巻かれた魚と共に魚種はサケとみられる．また，こちらの人物は長い髭がある（図12）．

一方，高い橋脚の橋のほぼ中央に２人の人が対岸（左岸）から手前（右岸）にと向かっている姿がある．前にいるのは子供とみられ，後ろは成人男性とみられる．この男性は木の枝に刺した大形の魚を数匹，背中にかついでいる．やはりこれもサケと考えられる（図13）．

次に画面左端の３棟の建物の前あるいはやや上に，棒のようなものが多数立っている．形状は図５と図８で示した杭列に形態が似ており，川のほぼ中央に，楕円形にみえる囲いが描かれている．

また，そこから伸びた杭列が「ハの字」状に両岸にむかってのびている．左岸近くでは上流側にその杭列とは異なる杭列がみえる（図14）．また杭列と橋に挟まれて全体は見えないものの，丸木舟が２隻，杭列に繋がれている．

４．描かれた場所について

以上４枚のスケッチの内容について述べてきたが，「千歳」という名前のあるスケッチは若干の異同はあるものの，川の形状や家の配置などから

からみて『従函館到札幌北海圖誌』「千歳駅鮭猟」の下絵と考えることができるだろう．

次に，これらの図は具体的に現在のどこで描かれたのだろうか．結論から述べると図の題名や長い橋の存在からみて，現在も国道36号線にかかる「千歳橋」付近から千歳川の上流を見て描いたと考えられよう．またこの付近の漁撈施設の位置が江戸時代と変わらなければ，後に述べるように「ひるしさったり」という地名の場所にあった施設の可能性がある．

次に関連して，江戸時代末のこの付近の様子を示す．図15は少し年代が遡るが，安政４（1857）年の「千歳川番屋の図」である．これは松浦武四郎の『夕張日誌』に掲載されている図である（古田, 1977）．

図16は図15の部分で小高い場所に鳥居が見える．この図は千歳川左岸側から千歳橋を挟んで南東方向を見た図である．橋のたもと，千歳川の右岸には「千歳川会所」があり多くの建物，馬，丸木舟がみえる．当時，ここは千歳の中心で勇払場所（太平洋側）―石狩（日本海側）を結ぶ交通の要衝であった．

この図に当てはめると少なくとも「千歳駅鮭猟」図は，千歳橋の右岸側から描かれたものとみられる．『夕張日誌』によると「千歳会所―略―蔵々建物多し．前に川有巾廿間斗源シコツ湖．板橋を架す．其辺り丸木舟多く繋．是皆石狩通ひの舟也下り二日上り三日．」とある．当時の千歳川の幅が「20間斗」（約36m）としており，川口月村が千歳を訪れた際も，中州を除くとほぼ同じ規

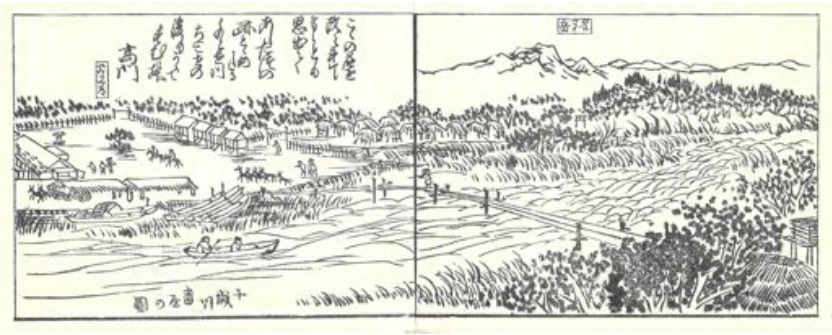

図15．千歳川番屋の図．

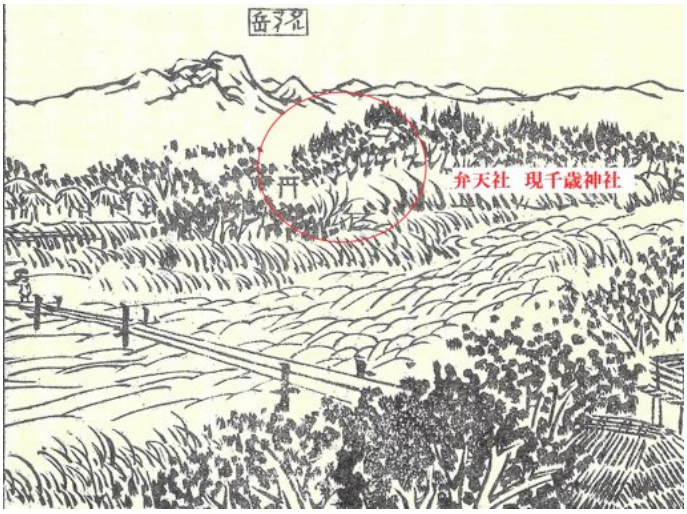

図16．図15の右側部分．

図17．千歳橋周辺の地図．〇印ヒルシハッタリ．

模の川だったことが考えられる．また，丸木舟以外の舟が見当たらない．このことは水深が浅いことも物語っており，「鮭猟」の仕掛けの水深がそれほど深くないこともうかがえよう．

最後に，図６の「『北海圖志』「千年川鮭猟之図」の描かれた場所について述べる．この図は「千歳」や「千歳駅鮭猟」の図とは建物の配置や橋の形状が異なっているように見える．この点からスケッチした場所が異なる可能性も含まれている．ただ，筆者が知る限りで，当時はこのような長い橋は他に架橋されていなかったと思われ，川の中の杭列がほぼ類似した形状である点から，やはり描かれた場所は千歳駅付近で，千歳橋越しに千歳川上流方向を描いたと考えておきたい．図17は現代の付近の地図で，川口月村はここから南東方向（上流）を向いてスケッチし，杭列は橋より上流に存在したものと推定される．

５．描かれた「鮭猟」の検討

最後に「千年川鮭猟之図」（図６）と「千歳駅鮭猟」（図11）に描かれた川の中の「杭列」が「鮭猟（漁）」とどのような関係を持つ施設かについて検討する．

結論から述べると，これらの「杭列」は表題のとおり，サケ捕獲施設と考えられる．もちろん杭だけでは捕獲はできないので，杭と杭の間の隅澗を埋めるすだれ状の柵（しがらみ）や網の設置が必要であるが，これらは省略されていると考えられる．

すでに述べたように川幅が20m前後とすれば，「千年川鮭猟之図」では，この川幅いっぱいに設置された杭列であり，「千歳駅鮭猟」では，中州を挟んで分流しているともみられ，その場合，幅６m前後の施設と想定される．

その特徴は，両岸から「ハの字」川中央に向かう杭列と川中央にある「コの字」あるいは楕円状の構造である．この二つは「魚（サケマス）の誘導柵」と「魚（サケマス）を集める部分」すなわち「魚溜り」見ることができる．誘導柵が下流に向かって開いているので，遡上する魚を捕獲するため漁撈施設と考えられる．こうした見方が正しいとすれば，この施設は「テシ」や「ウライ」などと呼ばれる伝統的サケマス漁撈施設に類するものと考えられる．

問題はこの施設が誰によって運営されていたかである．明治５年とすれば場所請負制はすでに廃止されており，場所持などといわれる人の所有だった可能性があるが，この点については~~今後~~さらに地域史も含め検討する必要があり今後の課題である．

本稿では，内水面漁撈施設として当時のどのようなものが使用されていたかについて，いくつか例示して今後の参考とする．

さて，川口月村の描いた川の中の施設をみるまず「テシ・ウライ」のことが浮かぶ．まず，知里真志保（知里, 1959）によると，胆振地方の明治時代末ごろの聞取りをもとに次のように述べている．

「（7）とめ（止）―「テシ」（tesh）川の岸から岸へ約二尺おきに杙を打ちならべ幾本も横木を結いわたしして柵をつくり，さらにそれへ竹のすだれを編んでたてかけ，鮭がぜんぜん遡上できないようにする．この施設を「テシ」（tesh）と称し，土地の日本人の方言では「とめ（止）と云っていた．」と述べている．

図18に示したのは明治初期，函館にいた平沢屏山が描いた図で，たも網をもった人物の前にあるのが知里真志保のいう「テシ」に一致する．

なお，この絵は日高かあるいは十勝地方のテシを表した可能性がある．この二つの例では少なくとも「直線的な杭列」特徴で「魚溜り」がない．

また知里は「ウライ」ついては「川瀬の早い所をえらび，やはり両側から漏斗形に石を積んで来て，ウライテク（やなの土手）をつくり」その終末に簽や棚を設けるとしている．ウライは石ばかりでなく魚の誘導柵を「ハの字状」に設置しその終末に簽（ど）や筌（うけ）などの籠状の道具を設置し魚を捕獲するものとしている（知里前掲書）．

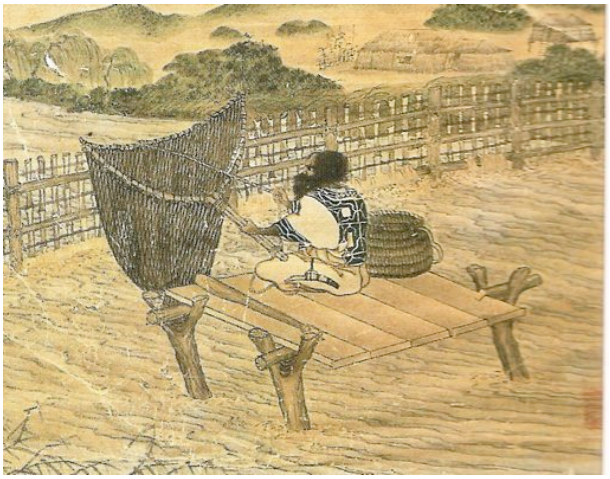

図18．平澤屏山「蝦夷人川魚を捕る図」（函館市立中央図書館蔵）．

次に，川口月村が開拓使を辞めた後，開拓使に勤めた船越長善がやはりスケッチを残しているのでそれを取り上げる．なお，船越は月村と絵の同門である．

描かれたのは明治６年〜明治12年の間と考えられる．その中に千歳川下流の長都沼で描いた図の中に当時この付近で「ウライ」と呼ばれていたものが記録されている（工藤・渡辺, 2010）．

図は北海道大学北方圏フィールド科学センター植物園の所蔵する「札幌近郊の墨絵」の中の１枚で標本番号「33025-10」で，表題は「千年郡千歳川下流ヲサツトウ西南ヲ望　」で，示したのはその左下部分である（図19）．そこに描かれているのは川を横断する横木のついたかなり背の高い杭列とその一部に上流側に突出部がある施設である．そしてその突出部に丸木舟にのった人物が網を上げている姿も描かれている．おそらく魚を水揚げしているのだろう．

説明に「土人　鱒鮭漁場　ウライト云」とあり，このような形式の漁撈施設を土地の人は「ウライ」と呼んでいたことがわかる（下線は筆者）．

この図を根拠とすれば，千歳川流域では遡上する鮭鱒を捕獲する施設の一つは「ウライ」と呼ばれるものであり，その構造は川を横断する杭列と下流側に突出した「捕獲部」から構成されていたことがわかる．

また水揚げは網で行っているとみられ，おそらく，この部分に袋網が設置されているのだろう．また，描かれていないが杭列の間は木の枝を編んだしからみ（柵）や網でふさがれていたと考えられる．この図は千歳川流域で明治初期の鮭鱒漁の施設の一種を知るうえで非常に重要な資料であることは言うまでもない．

次に，明治12年の開拓使がまとめた資料に「テス網」「ウラエ網」という図があるのでそれを見てみよう．いうまでもなく「テス」は「テシ」，「ウラエ」は「ウライ」のことである．

これの資料は明治13（1880）年ドイツのベルリンで開催された「伯林府漁業博覧会」のために開拓使が準備したものである（北海道立文書館所蔵3682）．ただ，この資料は地域がどこで用いられていたのか，まだ明らかでない．

図20は「テス網」の図である．この施設は網が付けられたハの字状の杭列とその終末にやはり網のついた「ひし形」の「魚の捕獲部」がある．図の解説には「鮭鱒ヲ漁スル為メ　テス網ヲ河ニ張布セル図」とある．

図21は「ウラエ網」とされる施設である．「ウラエ」は「ウライ」のことである．この図では，杭列の大部分は直線的であるが両端に角度の違う杭列が描かれている．図の解説には「鮭鱒ヲ漁ス

図19．「千年郡千歳川下流ヲサツトウ西南ヲ望」の部分．

ル為メウラエ網ヲ河ニ布置シタル図」（下線筆者）とあり，先に上げた知里真志保の「ウライ」の記載とは異なり，この図の「ウラエ網」はむしろ「テシ」に近い印象である．ただ，これが当時の北海道全域の標準なのかどうか，あるいは地域的なものかなど詳細は不明である．

なお「テシ網（テス網）」，「ウライ網（ウラエ網）」は幕末期になって，出現したと考えられる．筆者は「テシ（テス）」「ウライ（ウラエ）」の改良型と考えている．それまでの「テシ」と「ウライ」との基本構造は同じであるが，簾などのしがらみが網に置き換えられたものと理解する．ちなみに「留網」も「テシ網」「ウライ網」の和人呼称ではないだろうか．

高倉新一郎は「アイヌ政策史」（高倉, 1942）の中で「ウライ及びテス網」の構造について述べている．それによると「ウライとは，木枝若しくは石等を以て小川を遮断し，魚の遡上を妨げ，是を捕るもの．テス網とはアイヌのテシで丸太杭を六尺位の間隔で打込み，河身を横断し，石を以て網足をつけた網を杭に添って張切り魚の遡上を遮断するもの，（中略）．」とテス網についてかなり具体的な記述をしている．また，「テス網とはアイヌのテシ」とわざわざ書いており，「和人のテシ」というのものあったという印象も受けるが，明らかでない．さらにテス網は明治以前に禁止されているとも述べているがその根拠もあきらかでなく，今後，調査の必要がある．

最後に明治30から40年ごろ士別市内の天塩川でおこなわれていた「トメ」と呼ばれていた鮭捕獲施設の写真をあげておく（図22）．これは川を横断する杭列とそれにすだれ状の柵（しがらみ）を上流側にかけ，川を遮断．川下側には杭を支える棒がみえる．杭列の手前に台があり，男性が座っている．またこの台には丸木舟がつながれている．この施設を運営していた兵庫県出身の方の子孫の記憶によれば「天塩川の方は杭を打ち細い竹を麻糸で編んだ竹スを使用したトメと言う仕掛けで漁獲しておりました．」（川南, 1977）．この施設の構造は図18で示した平澤屏山の図とまった

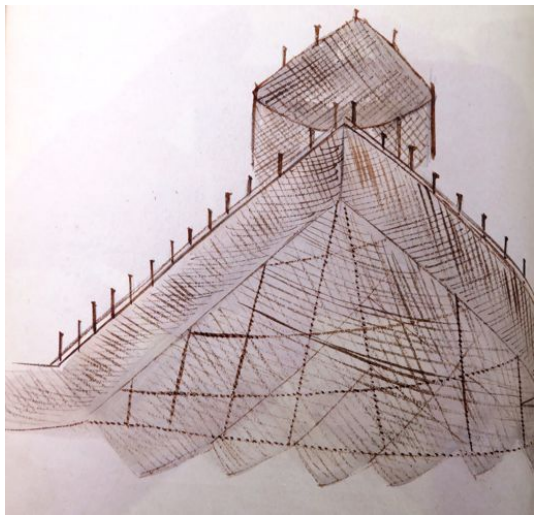

図20．テス網の図.

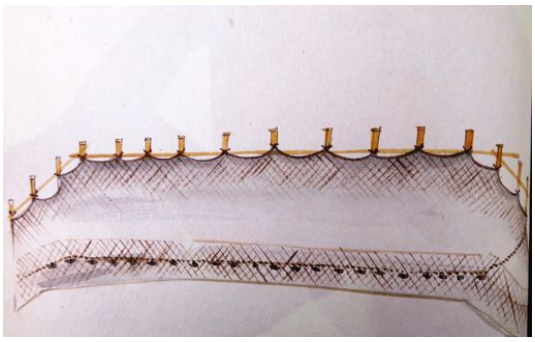

図21．ウラエ網の図.

図22．天塩川のトメ漁（士別市博物館所蔵資料番号20183）.

く同じである．また「トメ」という施設名が明らかな画像は初見であり，注目される．

なお，「留網」が写っているとされる明治４（1871）年の札幌市豊平川での画像がある．これは北海道大学図書館所蔵の「札幌豊平橋旧景」で後年，明治42（1909）の「温故写真帳第１集」に収録され，その説明には「留網」も写っているとあるが，礫を並べた誘導の石上のようなものがありその上流に杭列のようなものが僅かに見えるだけでよくわからない（田本, 1871；東北帝国大学農科大学, 1909）．

おわりに

以上，川口月村が現在の千歳市千歳川千歳橋付近で描いたスケッチにある漁撈施設について，それがどのような施設であるか検討してきた．同時に平澤屏山，船越長善，伯林府漁業博博覧会など同時代の絵図についても多少見解を述べた．現時点では川口月村が描いた漁撈施設は「魚誘導柵」「魚の捕獲部（魚溜り）」があることから，船越長善の図も考慮すると「ウライ」の一種だと考える．

ただ，明治33（1900）年の『千歳鮭鱒人工孵化場事業報告』（藤村, 1900）によると，天保年間（1830年）以降，千歳川流域の漁場は合計８カ所あり，これらは全て「てす」と呼ばれていたという．

また千歳駅近傍では「ぺるさ（は？）ったり」（駅の上流）と呼ばれる場所に２カ所の漁場があったとも述べている．明治５年当時もこの漁場があったとすれば，川口月村が描いたのは「ぺるさ（は？）ったり」の２カ所の漁場のうちの一つで，しかも「てす」と呼ばれていた可能性も否定できず，筆者が「ウライ」とした結論とは異なる．なお，図17に示したが，新千歳市史の「地名解」によれば千歳橋上流に「ヒルシハッタリ」という類似した地名がある．「ぺるさ（は？）ったり」がここであるとすれば現在の千歳神社の北側の屈曲部が相当する（西田, 2010）．また千歳駅近傍ではその上流に２カ所の漁場があったとも述べている．１カ所は地名が不明だが，もう１カ所「ぺるさったり」だという．明治５年当時もこの漁場があったとすれば，川口月村が描いたのは「ぺるさったり」の可能性があり，この施設が「てす」と呼ばれていた可能性も否定できない．なお，新千歳市史上巻の「地名解」（西田, 2010）によると千歳橋上流に「ヒルシハッタリ」という似た地名があり，あるいは描かれた施設はここにあった可能がある．

追記

（図23 石狩より千歳まで川筋見取略図部分
守屋利八郎潔経, 1866）

本稿提出後，「石狩より千歳まで川筋見取略図」（守屋利八郎潔経, 1866）のうち「エサリブト」の部分に「ウライ」の図があることをを知った．これは工藤義衛氏から教示されたもので同氏の論文（工藤, 2022）に取り上げられている．この場所は川口月村のスケッチ地点から約15㎞下流で現恵庭市の漁川と現千歳市の千歳川の合流点にあたる．図の記載では「エサリフト」で，記録された年代も明治２（1866）年４月と近い．図23に示したのがその該当部分である．本図は明治２

図23．石狩より千歳まで川筋見取略図部分
（守屋利八郎潔経, 1866）．

（1866）年４月で月村の絵の年代にもっとも近い．石狩役所の守屋利八郎潔経が業務で制作したもので石狩河口部分は欠失している．なお，この図及び「ウライ」については谷本晃久（2003）の先行研究がある．

図23はその該当部分で左が「千歳川」．「エサリフト」の記載を挟んで右が「漁川」である．「ウライ」は「千歳川」の方に棒状の線（杭列）の連続として描かれている．描かれたウライは合計３カ所と考えられ，それぞれ形状が異なっている．この理由は，設置してた位置の川床条件などによるものと考えられる．下流側にある「ウライ」は杭列が「ハ」の字形．上流側にある２列は川流に対してほぼ直角になるように配置されているように見える．３つの「ウライ」の共通点は，ほぼ中央に空間がある点である．いうまでもなくこの部分は鮭を捕獲する仕掛けや台を設置する．ただ，千歳川は石狩から荷物の運搬路となっており，この部分は舟道となっていたのだろう．千歳川の規模がどの程度であったか不明であるが，弘化３（1846）年の松浦武四郎の記録によると「此巾　凡十二三間（21.6～23.4m），尤深サ壱尋半（2.25～2.70m）より二尋計也（3～3.6m）．急流にして水至而清冷也．」（松浦, 1999）とあり，明治２年ごろも同程度だとすれば結構大規模な施設可能性がある．

また，「漁川」は寛政５（1799）―文政５（1822）に起きた「エサリ，ムイサリウラエ訴願事件」（高倉, 1966）の舞台となった川である．

謝辞：本稿をまとめるにあたり所蔵資料の掲載などにご協力・ご教示を賜った．お名前を記して感謝申し上げある．岩手県立博物館，盛岡市先人館記念館，秋田県にかほ市象潟郷土資料館，北海道大学付属図書館，北海道大学北方圏フィールド科学センター植物園，北海道立文書館，函館市立中央図書館，士別市立博物館，加藤克，三浦泰弘，工藤義衛．

引用文献

知里真志保，1959．アイヌの鮭漁．北方文化研究資料報告第14輯，北海道大学．

藤村信吉，1900．千歳鮭鱒人工孵化場事業報告．北海道水産課，2-3．国立国会図書館デジタルコレクション

船越長善．「千年郡千歳川下流ヲサツトウ西南ヲ望　」「札幌近郊の墨絵」．標本番号33025-10．北海道大学北方圏フィールド科学センター植物園．

古田武三，1977．松浦武四郎著「東西蝦夷山川地理取調紀行夕張日誌」．松浦武四郎紀行集下冨山房，304-338．

平澤屏山「蝦夷人川魚を捕る図」（ガラス資料350）．函館市立中央図書館蔵．

北海道開拓使，1879．明治12年伯林府漁業博覧会関係書類勧業係．資料番号3682．北海道立文書館．

川南昭彦，1977．北町開基の頃と川南友吉．22．北町大地神創祀五十周年・北町開基八十周年記念誌．

川口月村．北海圖誌．岩手県立博物館蔵．

川口月村．従函館到札幌北海圖誌．盛岡市先人記念館．

川口月村．明治初年函館札幌間道中絵図，23．図類1059-23．北海道大学北方資料データベース．

工藤義衛・渡辺隆，2010．船越長善「札幌近郊の墨絵」について．北大植物園紀要，10：97-116．

工藤義衛，2022．考古学から見た石狩低地帯．北海道の自然，60：34-39．

三浦泰之，2006．開拓使に雇われた画工の基礎的研究．北海道博物館紀要，34：81-112．

守屋利八郎潔経，1866．石狩より千歳まで川筋見取略図．秋田県にかほ市象潟郷土資料館所蔵．

西田秀子，2010．地名解　新千歳市史上巻．134-137．千歳市．

小野規矩夫，1980．興津寅亮 天塩川沿岸状況調査復命書（中）．新しい道史，18（1）通巻76号：30-36．

瀬川拓郎，2002．テシ・ウライとは何か．貝塚，58：1-10．物質文化研究会．

士別市博物館 資料番号20183．「天塩川のトメ漁」1897～1907頃（名称は仮称）．士別市博物館蔵．

高倉新一郎，1942．アイヌ政策史 506 注16．日本評論社．

高倉新一郎，1965．アイヌの漁猟権について．アイヌ研究，163–217．北海道大学生協

高倉新一郎，1997．挿画に拾う北海道史．150-158．北海道出版企画センター．

田本研造，1871．札幌豊平橋之旧景．北海道大学北方資料室蔵.

谷本晃久，2003．榎本軍政下の石狩川下流域・千歳川流域図を読む―．象潟郷土資料館所蔵「石狩より千歳まで川筋見取略図」の概要．雄波郷，７：9-24．にかほ市教育員会，にかほ市郷土研究会.

東北帝国大学農科大学編，1909．温故写真帖　第１集（札幌）維新堂.

山田伸一，2021．開拓使による河川サケ漁の「テス網」と夜漁の禁止．北海道博物館研究紀要，６：183-200.